

# 兵庫県現代詩協会 会報 40号 2016年 12月 15日 発行 たかとう匡子

## ◇二〇一六年度 ふれあいの祭典

### 詩のフェスタひょうご報告

十月二日(日) ラッセホール・リリーの間に於いて、十三時三十分より「二〇一六年・詩のフェスタひょうご」のイベントが行われた。今年度は兵庫県現代詩協会設立二十周年にあたり、詩のフェスタひょうごのイベントの過去の企画などの推移にも思いをはせられた。当日、受付は玉井洋子常任理事、丸田礼子常任理事、尾崎美紀常任理事が担当した。季村敏夫理事は講師の接待を会長・副会長と共に受け持った。

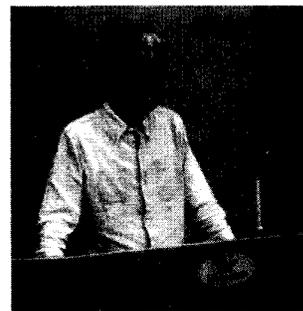
第一部講演は時間通り、時里二郎副会長の司会のもと開始された。たかとう匡子詩のフェスタ実行委員長が挨拶をされ、東京から来神された詩人の高橋睦郎氏の講演が始まった。演題は「女性詩の力に導かれて」。少し体調を崩されているとのこと本人のお話であったが、張りのお声でお話が進められた。(講演内容については次頁に記事を掲載)。少し講演を早く終わられ、会場からの質問に全て快くお答えくださり、詩や短歌、俳句のまで及ぶ文学の広範囲な活躍ぶりに改めて敬意を払う。自身の作品も朗読して下さった。「女性詩」がキーワードの講演は実体験を踏まえた貴重な内容で、現代詩、短歌、俳句、古典文学に通じた高橋氏の創作の一端に触れた。このことは呪文、巫女の唱える言葉などの広い範囲から、女性(によしよ)性が通低している秘密の在り方のなかに詩の本質を見て、「自己主張ではなく、自己開放です」と話された高橋氏を支える強い詩意識ではないか、と思う。

第二部の自作詩朗読会は、十五時三十分より大西隆志常任理事の司会で開始された。今回の応募者は十四名であった。県内はもちろん、和歌山、大阪、などから応募された。なかには、昨年度参加された方もおられた。今年度の『詩のフェスタひょうご朗読詩集』も配布され、詩集の並び順に朗読がスタートした。自作詩朗読者は、李紗英、イチゴミルク(欠席)、小栗秀夫、尾上礼文(途中退場)、香山雅代、後藤さく子、芝修平、高木朝雄、ナイロンかむはむ、中尾彰秀、中嶋康雄、野崎真奈美、野田かおり、藤井雅人の各氏。老若男女による多彩な詩の朗読会になった。それぞれの個性で朗読され楽しむことができた。これまで詩とあまり関わりのない方々も挑戦してくださり、今後も詩を書いてゆきたいと事後の通信をいただいたことは、詩のフェスタの収穫であった。

「ふれあいの祭典」は兵庫県の県民文化普及事業で、「詩のフェスタひょうご」は、県民に詩を親しんでもらうことにあり、講演会を持ち、一般応募者による自作詩朗読と朗読詩集も発行している。詩のフェスタは兵庫県との委託契約で行われている。県民の方がたに詩の理解が広がり、また深まったのかどうかはわからないですが、このように地味な講演会など、心に深く響く催しを今後も企画してゆきたい。

今回の「詩のフェスタ」の参加者は、現代詩の愛好家だけではなく、広く県民をはじめ県外からの参加者も多く、現代詩以外の歌人、俳人の方々も多数参加された。参加者は八十一名(内、会員四十七名)。兵庫県のアート支援募金にも協力した。

高橋睦郎氏の著書は会場に展示。  
「高橋睦郎詩集」現代詩文庫。続「高橋睦郎詩集」現代詩文庫。続続「高橋睦郎詩集」現代詩文庫各。「現代詩手帖」高橋睦郎特集号。

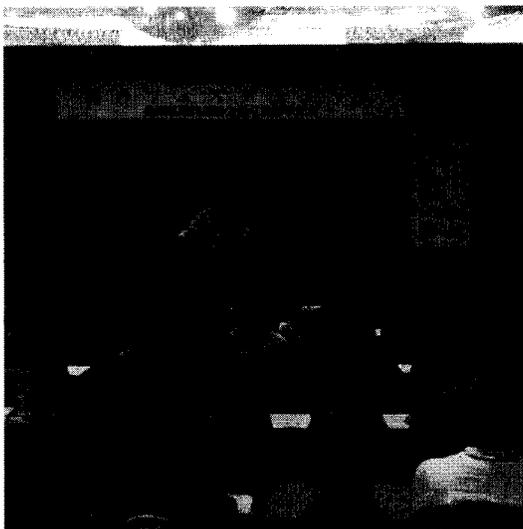


講演中の高橋睦郎氏

閉会の挨拶は神田さよ事務局長が述べ、16時30分に予定通りに終了。その後、懇親会会場へと移動。高橋睦郎氏も参加して下さり、講師を囲んだ懇親会はニューミュンヘン神戸大使館で開かれた。大橋愛由等常任理事、高谷和幸理事の司会で、参加者25人全員のスピーチもあり、遠方からの方々も含めなごやかに過ごした。

(報告・神田 さよ / 大西 隆志)

詩のフェスタひょうご会場・ラッセホール・リリーの間



高橋睦郎さんの講演  
演題 『女性詩の力に導かれて』

## 講演趣旨

高橋睦郎です。今日の講演のタイトル、実はこれはゲーテの言葉のパクリでして、『ファウスト』の中に出てくるものです。「永遠に女性なるもの我らを導く」、それはそのまま僕の実感です。

僕はまもなく七九歳になり、振り返ればその半生の中心は「詩」でした。その「詩」が中心の人生に僕を導いてくれたのは、男性ではなく女性だったというふうに実感します。

中学に入学して、本当の意味での詩との出会いがありました。同級生に誘われて文芸部に入り、蔵書の一冊であった呉茂一訳『ギリシア・ラテン抒情詩選』を読み、何か分らないが打ち震える感動を覚えた。それが詩との出会いだと思います。

文芸部の柳田千鶴先生の指導で詩作が習慣になり、僕は書くことを覚えてしまいもう抜けられなくなりました。これも女性の先生ですね。これが、後に女性詩人たちに導かれる底流になったのだと思います。

本題の女性詩に入りますと、僕が女性詩人で最初に大きな影響を受けたのは、片瀬博子という人でした。一九二八年に生まれて二〇〇八年に亡くなっています。読み返すべき重要な詩人だと僕は思います。

片瀬さんとの出会いは一九五九年でした。福岡学芸大学の四年生の時に結核に罹り、死を考えるが生活保護があることを知って、県内の結核療養所に入所します。入所直前に出した第一詩集『ミノ あたしの雄牛』により、推薦されて同人誌「地球」に同人費免除で加わりました。

片瀬さんも同時期に「地球」同人になり、知り合ってから見舞いに来てくれるようになりました。詩の話をよくしました。治つてからは彼女の家を僕が訪れ、付き合いは続きました。片瀬さんの詩は僕にとっては全く新しい世界で、これを一口で言う命の頂点においてエロスとタナトスが結び付いた、性愛と死が結び

付いたそういう詩でしたね。

結核罹病者は教職に就けないことを知り、卒業式の翌日上京するんです。そして「地球」の集まりで同郷の詩人安西均に出会います。ある時安西の会社、日本デザインセンターに行ったら、今日からバイトしてみますか、と言われバイトで入りました。

そこに入つて二年経つて詩集を出しましたが、ある日、谷川俊太郎とぼつたり会い、実は詩集を出そうと思つており、もし目を通して頂いてお気に召したら、何か書いて下さいますかと言ったら、「じゃあ送つて下さい」ということになり、跋文を書いて下さり詩集『薔薇の木 にせの恋人たち』が出た。

その詩集に対して非常に好意的な批評をしてくれたのが、多田智満子さんだったんです。その後、白石かずに紹介されて、彼女とお付き合いするようになりました。

僕の中には元々、キリスト教的な世界への関心と同じぐらい、古代ギリシヤ的な世界への関心がありました。キリスト教世界への関心において、僕を導いてくれたのが片瀬博子なら、古代ギリシヤ的世界へ導いてくれたのは、僕を弟的存在として一歩先んじて共に歩んでくれた多田智満子でした。

多田さんと僕の歩みにはもう一人同行者が居ました。鷺巣繁男という存在でした。僕たちは三人が共に敬愛する呉茂一先生を顧問格に「饗宴」という名の同人雑誌を出しました。その事で多田さんと僕は一層親しくなりました。

多田さんが病氣になって、その前に僕が詩集を二冊編集したのは、多田さんへの長年の付き合いに対する細やかな恩返しです。

多田さんが亡くなったのが二〇〇三年一月で、片瀬さんは一九九三年に脳出血で倒れています。クリスチャンホームに育つた人で、キリスト教の宣教活動をやり、教会堂建設に非常に尽力して、その献堂式に出た、その後倒れたんです。その後の、リハビリ期間中に書いた詩が本当に素晴らしいです。倒れた後の詩が。

そして詩集を纏めたいと言うので、『片瀬博子詩集』を僕は編集しました。

片瀬博子と多田智満子という優れた女性詩人に出会い、導かれることが無かったら、自分の詩は随分貧しいものになっていたという事だけは言えます。

結局僕は女性詩人、あるいは女性歌人・俳人から色んな影響を受けています。その女性詩人とは一体どういう存在なのかという事です。その前に詩はいかにして発生したのかを説明します。

詩には宗教の中から詩が発生、あるいは男女の恋から発生した、あるいは労働歌とか、そういう中から発生したという、三つの大きな説があります。

僕は日本人である所為か、恋愛発生説に傾きます。それは宗教含みの恋愛発生説です。恐らく歌の起こりは、男神から妻である巫女へ呼びかけたので、男性から歌が始まったと思いますが、神には本来音声がありませんから、それは巫女の口を借りて歌い出すと。つまり、巫女という女性こそが最初のうたびと歌人であり、詩人だったのが男性に奪われた、それが詩の歴史だと言つていいんじゃないでしょうか。

事実の上でも、日本の最初の大歌人は巫女的要素の強い、額田王ですね。その後輩として宮廷歌人の柿本人麻呂がいます。宮廷歌人は天皇及び皇族など男性的なものに対して、女性的スタンスに自分を置いて歌う、そういう存在です。

人麻呂に続く山部赤人も大伴家持も、のちの紀貫之、西行、定家、能の世阿弥、俳諧の芭蕉も大詩人は悉く女性的要素を色濃く持っています。これは近代詩の島崎藤村、蒲原有明、萩原朔太郎、宮沢賢治などにも言えることではないかと僕は思います。

現在は、自由詩も定型詩も元気がいいのは女性です。女性詩の時代だと僕ははっきり言えると思う。これは詩本来、詩人本来のあり様に立ち返つたんだと思います。男性詩人たる者すべからず、虚心に女性詩人に導かれるべきではないかということ結論にして、この講演を終ります。

(梅村 光明)

## 兵庫県現代詩協会創立 20 周年記念会 & 『ひょうご現代詩集 2016』 出版記念会

— 詩で架けよう 未来に向かって —

今年度で協会は創立 20 周年を迎えます。下記の要領で記念会を催すことになりました。  
詩で繋がる輪を感じる楽しい会になればと思います。是非会員の皆様ご参加下さい。  
途中で昼食、歓談の時間があります。

記

日時 2017年3月18日(土)  
午前11時30分～14時30分(受付11時～)  
場所 元町 風月堂ホール  
神戸市中央区元町通3-3-10 ☎078-321-5602  
参加費 4500円(食事、飲み物代含む)

\*プログラム\*

- ・DVD 映写 兵庫県現代詩協会の20年を振り返って
- ・協会員主宰の詩誌の紹介……各詩誌の同人の方の出演 (日頃、詩誌の上ではおなじみの方々を直に紹介していただいて、さらに交流を深めたいと思います。各詩誌・個人誌の成り立ちや同人の紹介など。もちろん、なにかパフオーマンスをしていただくこともできます。各詩誌から何人でもご参加ください。本協会会員以外の方のご参加も歓迎します)
- ・ラテン音楽の演奏
- ・『ひょうご現代詩集2016』に参加した全ての作品の一部を編集「155の言葉」として、プロの演劇人が朗読。
- ・その他交流も含めた楽しいこと。

先日お送りしたハガキにて出欠をお知らせ下さい。(切手を貼ってください)

申込み締切 2月20日(月)

## 第6回 Poem & Art Collection

会期 2017年1月14日(土)(午後1時)～24日(火)

期間中 午前10時～午後5時(最終日は午後3時迄)

会場 神戸文学館(休館日 水曜日)

— 内容 —

☆ポエム&アートコレクション(会員による詩・アート作品の展示) ☆兵庫・詩の現在展(会員の詩集・詩誌展示)

☆特別イベント(2017年1月21日土曜日午後2時～)

講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る ④」※たかとう匡子が君本昌久について講演します。

コンサート「歌うように 語るように」またコンサートでは甲斐誠三・恵子がシャンソンの「名曲」を取り上げます。

.....

詩人が綴った詩と、その詩に寄せたアート作品(絵画・書・オブジェ等)とを組み合わせ展覧会が今年も神戸文化館で開催されます。みずみずしい感性と想いで表現された作品は、「私」という範囲からの逸脱あるいは濃度のこい「私」への回帰等、振れ幅の大きい体験を与えてくれるのではないのでしょうか。会場を訪れた皆さんに、身体に浸透し、長い時間記憶に留めることができる作品との出会いがありますように。たくさんの方々のご来場をお待ちしています。

(丸田 礼子)

☆出品者 阿部 由子 大西 隆志 大橋 愛由等 和比古 香山 雅代 鈴木 漢 玉井 洋子 永井 ますみ  
西海 ゆう子 福永 祥子 牧田 榮子 松下 玲子 丸田 礼子 水こし 町子 山本 真弓 由良 佐知子

☆コンサート「歌うように 語るように」

詩に比べて、歌詞は声に出されることを前提として書かれていることばですが、今回は取り上げる歌にフランスの「シャンソン」を選びました。主に物語性を重視した人生を描いた歌詞や聴く者に話しかけるような歌い方が、きっと胸の琴線を震わせることでしょう。名曲「ラ・ボエーム」や「愛の讃歌」など、それぞれのドラマが皆さんをお待ちしています。ご期待ください。

☆ギター 甲斐誠三(音楽家)・歌 甲斐恵子(音楽家)

特別イベントのお申し込みは神戸文学館へ→TEL・FAX078-882-2028 詳しくは別紙のチラシをご覧ください。

## 拒みの海―大島即興詩

2016年8月29日に「カフェ・エクリ」（高谷和幸代表の企画で瀬戸内美術祭に参加した際にハンセン病療養所がある大島を訪れ、そこでの感想をもとに即興で書き下ろした詩作品です。

## 大島幻視行

大西 隆志

隔たりは深い  
波はやわらかなのに  
時間も過酷に刻まれる  
海を渡る鳥の羽搏きと滑空の自在さに  
隔離、ということばが  
島とつながっていく  
流された泪の先の死が形になつていくのか  
磔にされたわが精神をどうするのか  
隔たりを知れ

わたし、わたしたちは病者を鞭打ち  
記憶から消しさり、なかったこととしてきた  
遠い場所に置くことでわたしたちもバラバラの身体を抱え  
自らの存在を

影さえも、声さえも、ただ名前だけが浮かび漂い  
積雲の焦げた壁にむかい貼りつけられる  
誇り高い精神  
離れていく島影へと

一艘の舟を漕ぎだすのは  
身体をなくし風の音にほどける  
ヒトの輪郭

虹の架橋をとぼとぼと歩くことで  
よみがえるわたしたちと  
あなたたちのひとつひとつの  
小石の強さと哀しさに  
つながっていく

## ふるえ

月村 香

島に着く  
からだがスピュテイルに立つ  
浜風を受ける  
サンシビイテイをと

希求する  
島に佇つ

半ば甘えながら  
観察が始まる  
どうしても

わかつていた  
旅を

人間的精・神的狂氣的に  
島を踏みしめた瞬間から  
すべてはあらかじめ  
終わっていたということ

## 大島

高谷 和幸

島のくずれ  
と云われつづけていたようだ  
木に似た人が立ち  
見えないが  
人の間のある  
ループの先はもう無い  
追われていたのだろうか  
追いかけて坂道を上つたのかも知れない  
島はくずれて穴があいたのです  
背後から気配に押されて  
海の見える防波堤まで来ていた  
風は顔の真中に穴をあけ  
太い樹木も直角にはげてしまふ  
島はくずれたのです  
そのくずされたものが  
しずすものと  
そこにいた

## とどかない

大橋 愛由等

海鳥たちがなきやんでいた  
海辺に置かれた丸椅子に

座る者なんて誰もいやしない  
はためいた旗は  
きのうの風を回顧しつつけ  
届いていた  
あの声は  
私の心をささくれさせて  
島から消えたのか  
くねる島のつづら  
拒みの防波堤  
巡航する既視感に  
その声 そのかすかな まさぐりを  
たぐりよせても 手を伸ばしても  
積みかさねられた石積みの  
あわいの にぶく光る黙もだの  
つらなりだけが  
そこに ある ばかり

## 青松園

にしもとめぐみ

高松の港を出て15分ほどで大島に着く  
波は高松より荒く牙を剥く  
迎えてくれたのは立派な松

青松園  
1909年からハンセン病患者を受け入れ続けた療  
養所だ  
納骨堂には、2500あまりの遺骨が遠く海を眺めて  
眠る

入所者たちが歩いた道を踏みしめる  
雨でぬかるんだ道  
一匹のセミが空を見上げて死んでいた

死んだ後の霊がせて自由に空を飛べるようにと  
島から帰ることができなかった人々の  
静かな暮らしを見た一日

## ◇第八回読書会

## 「三好達治の詩」

二〇一五年十一月二三日

私学会館

チューター・北岡 武司

まず、三好達治の詩について、詩風の変遷を通して、篠田一士が「風狂」と特徴付けたことを挙げ、時代とともに生き、書き、そのつど「風が狂う」からだ。更に「哲学は皆目無学でよい」とし、「三好は時代に応じて庶民的レベルで自分や人々を励まそうとした」と。私はこの論については、確かに晩年は詩壇的孤立をものともしない「風狂」の境地だったかもしれないが、むしろ生誕からずっと変貌の激しい時代の変遷や不遇な境遇を生きながら変節しないで一本気を通した詩人ではなかったろうか、という思いがする。

ともあれ、北岡氏は冒頭に「私は高村光太郎が好きだが、三好達治には関心がなく好きとも思わなかった」と断り、その上で「この世」「あの世」「永遠」「ノスタルジー」といったことに着目し、「雪」「乳母車」「薨の上」「昨日はどこにもありません」「海よ」の作品を取り上げて解説した。

「雪」は二行の呪文のような詩で雪の降る音が聞こえる静かな世界を表すと述べたが、むしろ雪が音もなく降り積む無音の世界の静かさと怖さを思う。「乳母車」は乳母車に乗った幼子（私）は時の道を行き、夕映えの向うに続く道を知っている。「取り残される」という感情は常に三好の底にあった、という解釈に同感。「薨の上」は古語を生かした雅な語の繰り返しだが「あわれ」を写し出す。「海よ」は三好のところが「人の不実を怒る」ことも「自分の真実に酔う」ことも止め、世に背を向け「海」へ向かう姿だという。そして海を前にして己の死を視界に置き「天の呼び出し」に耳を澄ます。そのために「門を閉じ」「心を開く」と解説し、三好は心の真下の水を汲み上げ、自己を投影し、命を燃やすように詩を残した、と結んだ。

その後、改めて詩集を開き、根底に人を愛する心があつたからこそ、優れた美しい詩篇は尚人の心に宿り、励ましを与えているのだと思つた。生涯勉学し努力し、真正直で誠実な人ではなかつたか、孤独を愛せたのも慈愛の人だつたかと思つた。最後に「海」で締めくくりたい。

既に鴉は遠くどこかへ飛び去つた / 昨日の私の詩のやうに / 翼あるものはさいはいな…… / あとには海がのこされた / 今日の私の心のやうに / なにかぶつくさ呟いてゐる……

(山本 真弓)

## ◇第一〇回読書会

## 「高橋睦郎さんの詩について」

二〇一六年七月三十一日 私学会館

チューター・時里 二郎

(1)はじめに

時里氏と知り合ひであった望月通陽氏、この方は染色家で、今では、プロンド、鉄などに作品を広げておられるが、この方の招きで大分へ行く機会があつた。ここへ高橋氏が講演に来られるというところがあり、この三人の繋がりの中で、今秋の高橋氏の神戸での講演の快諾を得た。高橋氏の基本的な人生観は、恥しい者、醜い者であり、いわば（おでき）のような者である。しかし裏を返せば一種特別な存在ともいえるのである。自己を越えたセンサーのような存在ともいえる。

(2)六十年代の詩人たち

六十年代の代表的な詩人といえ、吉増剛造、岡田隆彦、天沢退二郎、渡辺武信、鈴木志郎康、北川透などの詩人達であつた。これらの詩人達の特徴は、特異なイメージ、スピード感、完成の拒否、モラルの排除などをあげることができる。しかし、高橋氏の詩的出発は非常に古典的な、言葉のロジックに沿うものであ

り、そういう意味では異端的なものであつたといえるだろう。彼の詩学、神（ポエジー）しるしなき神（ポエム）に例えられ、ポエジーがポエトトを選ぶという図式になる。ポエジーを受け止めポエムを生み出す詩人というカトリック神学の世界といえる。

(3)大スランプの時代

一九七一年「頌一ほめうた」から、一九八二年「王国の構造」（藤村記念歴程賞）までの諸作は、作者によれば大スランプの時代であつた。それは書いていても手応えを感じない時代であつた。しかし、時里氏によれば皮肉にもこれらの諸作は素晴らしく『王国の構造』は、バイブルといえる詩集である。この時期の作品は言葉による大きな聖堂であり、ここに詩人の（私）は入つて来ない。これが大きな特質といえるだろう。

(4)詩人を「着る」

一九八二年「鍵束」によりスランプの時期を脱することができた。それは交通事故による入院を契機にそれを自覚したという。それは他者へ捧げる詩であつたり、哀悼の詩であつたりする。例えば「小夜子」という哀悼詩では、「顔も体もない」詩人が、他者（死者を含む）を着るといふ形で、他者と同時に「私」をも表現しているという形になつている。「私」は生身の私ではない。それは古典芸能である能に近い。演者が、平家の霊を登場させるのはワキ（僧侶）である。この「私」は能のワキに近い存在と考へてもよいのではないだろうか。

(5)短歌、俳句など

句集として『稽古飲食』、歌集として『持たな週末』がある。後者は必ずしも面白いとはいえないかも知れないが、非常に形而上的なものがある。

最後に、高橋氏の「私性」の転換についていえば、時里氏が「現代詩手帖」（二〇一五年）に書かれている

してやまない詩人の『私性』であり、それも詩にうつりこむ影のように、作品空間にとどまることはない。修辭の増幅は常にからっぽである。

それは「ちようど『小夜子』において、サヨコが通り過ぎていったように」ということなのである。

(田中 信爾)

## ◆激辛コラム

「」と「」の奥にあるものゝわくらは日録・抄」  
富 哲世

日常や社会や政治などの様々な場面で使われていることは、それらを詩とことば問題と折り重ねて考えてゆきたいと思っている。

『さわるなクソ、さわるなコラ、どこつかんどんじやこのボケ、土人が』(巻舌舌)

こう抜き出せば、このあらゆる物言いは、酔っ払いか何かの、単なるガラの悪い関西のケンカか漫画の吹き出しのひとコマのようなものに思われるだろうが、これは今日アナウンサーの更迭など右傾化を取り沙汰されている三呆のニュース番組などでも取り上げられた、兵庫県 国頭郡 東村高江のヤンバルの森を切り開いて造成中の、アメリカ軍のためのヘリパッド(ヘリコプターなどの離着陸地の工事現場において、反対派市民の抗議行動に対して、派遣された機動隊員がフェンスをはさんで相対した人垣同士の押し問答のさなか吐いたとされる、考えてみれば衝突の現場では如何にもありがちな、せりふのひとつである。どこに問題があったのか。

確固とした命令系統に統制された縦社会のなか、場面面でひとを助けも殺しもできる 役目を負った善良な機動隊員のひとりとして、沖繩という舞台を恐らくさほど意識するでもなく、彼はここで関西弁独自の「ドスの効かせ方をことばの「武器」として巧みに極く

自然に活用している(まあ、ある種の積極的なもめ事意識があったと考えると、この点ではヤクザも機動隊も選ぶところはない)。わたしの居る播磨あたりでは売り言葉に買い言葉であるとするならもうすこし慎重なく挑むとすれば「どこ掴みよんどのい、放さんかいワレ、このダボ!」というくらいで済ますところであろうか。だがそれだけでは威嚇するにあたつて単に相手と対等な渡り合いに終わってしまい、鎮圧制覇する側としての収まりが悪くなる。そこで思わずキレて、吐き出してしまった行儀の悪い、付けたしの一言が『土人が』である。『土人が』であつて例えば『ヤクザが』ではなかつたことはその折りの己がヤクザ的威圧のポジションを心得ていたというべきか。実際ビデオで観る限り、この物言いに對しては抗議派側から『ヤクザ!』という野次が繰り返し飛ばされていたのである。この『が』という助詞がその時の機動隊員の対抗感情というものをとても能く反映している。「土人」というような昨今ではほぼ死語に近い古風な差別語を思わず口走つてしまふところにはコミカルささえ感じとつてしまふが、意識下にはそういう土着的な差別意識が連綿と生きつづけており、実はそれを死語と捉える正気がいままた失われつつあるのかもしれない。なぜ「土人」と言つたか、それは思はず心の内に映つたままをそう口走つたのである。密室でのことは知らないが、ヤクザにはそれ向けの餞のことばがあり、きつと左右のアナキズム的勢力などに対しては馬鹿にはしないそれなりの相応しい呼び方の使い分けがあるのである。

勝ち組と負け組に色分けする言いくさが当たり前となつていような社会で、自分は制服を纏い、与えられた権力の量の内役目を得て今ここに立っていると分かつていような社会で、自分の今こそが「時代」の正統であり、如何にも統制のとれていない見場や訓練不足のあり様をした、抵抗するもの姿かたちは烏合の衆として「時代遅れの」、「負け組の」怪しい土人に見えてしまうのである。皮肉なことに、一面ではそれは正解ではある、なにせ一方が殺傷道具の使用権利

で土俵ぎわを守られているのに対して、一方はいまのところ、拳やせいぜい石つぶつてや身を投げ出す自己犠牲くらいしか自らに使用を認めていないのであるから。その矛先を誰に、どの相手に向けるか、その強権と、場面によつては強弱の逆転しうる抵抗の倫理をどう使うかは、それこそ双方それぞれの問題、またお互い同士の問題ではある。

同様な場面と同じ立場の者によつて言われたという「シナ人」発言においてもそれはまた同じである。日の丸を権力的に背負つてしまうと、日の丸こそが主人でありその他は近親憎悪的に見下すべきシナ人にみな見えてしまうのだから。

「土人」も「シナ人」もここではおそらく、差別理念ではない。理念なき差別なのである。あるいは現今のいわゆるネットウヨなどの短絡的で反射的なことばの氾濫も多分に影響しているのかもしれない。

そしてマスコミを利用して衝突の現場を個人や局地的な出来事として矮小化して、責任を現場に転嫁して済むと高を括り力で物事をすすめようとしてるのが、ポピュリズムを言われて久しい、政権による政治のことばではないだろうか。

## ◆読書会についてお詫び

第九回読書会、レクチャーの高谷和幸氏「草野心平の詩について」の報告は会報編集の手違いで次回に掲載します。読書会で取上げてほしい詩人がいらつしやたら、事務局にお知らせ下されれば幸いです。

## ◆会報39号表記ミスについてお詫び

前号会報、第2部の永井ますみ氏の講演「万葉集と大伴家持」の講演趣旨のなかの文章で、大伴家持が大友家持になっていきます。表題は大伴と正しい表記ですが、本文は気付かなく間違つた大友のままです。編集校正のミスです。執筆者の佐伯圭子氏、講演者の永井ますみ氏に慎んでお詫びいたします。

『竹中郁詩集成』未収録作品

季村 敏夫

戦時下の東京から刊行された同人誌『航海表』三号（昭和三年九月発行、編輯兼發行者中村喬、發行所聖保羅詩學協會、市外澁谷町長谷戸廿七番地）に竹中郁の小品が掲載されている。

航海の手帳（印象のきれぎれ）

トミタサンニ

竹中郁

・神戸解纜

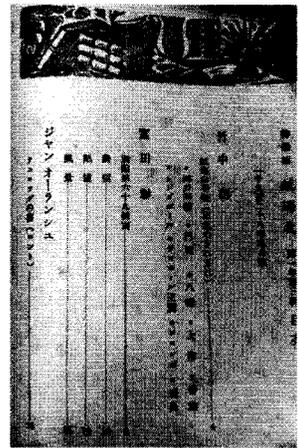
ロングサインが牛のやうに鳴いた。僕は花束とサアペンタインとに埋まつて、まるで楽しい牧場にあるやうな気がする。母親の涙が太陽さまに向つて、遠い両眼鏡のやうに光つてゐた。

・門司

何て美しい石炭だらう。石炭は労働者の手から手へ渡つて、いよいよ火夫が投げ込む時には、かつと眼をむく寶石だ。

・八幡

二等客車に乗つてきた貴婦人の、そつと覗いた白足袋が、家なし猫のやうに汚れてゐた。皮肉にも。



『航海表』目次

・上海

使ひ残した小洋貨三枚を、怪しい支那人と兩替するより、ウエストミンスタア二箱と一束の三色董とを買つた方が、はるかに氣持はせいせいする。

・香港

ここは要塞地帯です。うっかり書いて罰金とられちやつまらない。

・新嘉坡

水に沈んでゆく銀貨を追つけて、黒ん坊は足の裏をみせる。ああ、そこだけが、ペンキを塗つたやうに白い。僕はいくたび、銀貨を海に投げただろう。

・ジョホール王國

王妃の墓石にばらまかれた蘭の花に匂ひのたかさ、そのうへで背中をくねらせてゐた一匹の蜥蜴の美しさ。熱帯國の午さがり。

・コロンボ

印度人の寶石商人、偽の硝子の玉でさへ、彼等の肌の傍では美しい。夫人、だまされてでも買ひませう。

・亞典

不毛だ。蚤もかくれるところがない。それなのに黒死病が流行つてゐて、僕ら船客たちは上陸禁止をくらつた。

トミタとは富田彰で、第一次『羅針』時に竹中郁の周辺にいた詩人である。『羅針』十二号（大正十五年）の広告欄に富田彰の近刊詩集『窓の微風』とあるが、一冊の詩集を出すことなく京都で自殺している。同志社大学入学、天野隆一主宰の『青樹』（京都詩人協會）に三号（大正十四年）から参加、やがて関西学院英文科へ転学、さらに立教大学へ、『航海表』を主宰した中村喬とはそのときに知りあつたとおもわれる。

※拙著『窓の微風—モダニズム詩断層』（みずのわ出版）の『羅針』の富田彰のこと参照。



『航海表』表紙

## 会員の詩集評

## 時里 二郎

『田中荘介自選詩集』（澤標）。田中荘介さんは、もう伝説になりつつある詩誌「たうろす」の同人でいらつしやった。既刊詩集『小目野』『少年の日々』に、未刊詩編として「日本霊異記」に拠る作品群などが自選され、他にエッセイも収録されている。『小目野』（1998年）は出色の詩集だ。「播磨風土記」を下敷きに書かれているが、注目すべきは、その簡潔なセンテンスに込められた詩のリズムに、古代の人々の息遣いを聴き取ろうという工夫の獨創性である。風土記の日本語をそのまま移すのではなく、あくまでも「今、ここ」に生きている日本語を使って、しかも風土記にうずめられた古代人のこころの声を甦らせようというのである。「仰向けにされ／黒目大きく見開き／軟らかい温い腹に／和毛（にこげ）光っていて／鹿は静かに四本の柱に縛られ／惨劇の瞬間を／一待つ／鹿色の利鎌がなめるように／這う／這わせるのは何故（なにゆえ）の儀式か／女の白いしなやかな腕／しなやかな白い腕にも／わずかな生毛／白い皮膚の下走る青い血の管／皮膚の下流れる熱い生毛／切り裂かれるのは／鹿色の鹿の白い和毛なる下の皮膚か／鈍い光放つ刃物つかんだ皮膚か／」（「殺意」部分）。これは風土記の「妹玉津日女の命、生ける鹿を捕り臥せて、その腹を割きて、その血に稲を植ゑき。」を下敷きにした一編。生死の境に置かれた獣の息遣いと、それを裂こうとする玉津日女の白い腕とその下を走る青い血。風土記の時間に封じられていた息詰まる古代の時間が「今、ここ」に差し出されている。見事な一編である。第二詩集『少年の日々』（2006年）。ざっくりと切り取られた戦後の日常のディテールの鮮やかな切り口。余分なものがない。そのかわりに、そのなかに一切が詰まっている。少年の日々の回想だが、ノスタルジーは後景にしりぞいて、少年の日々を冷徹に見据える目が光っている。

安水稔和『隣の隣は隣―神戸わが街』（編集工房ノア）。阪神淡路大震災から二十一年目を迎える。安水さんはこれまでに『神戸』これから―激震地の詩人の一年』など、震災詩文集を四冊刊行なさっている。これは五冊目の震災詩文集。「震災後十年目の夏から二十一年目の一月までの十年余の震災にかかわる詩と散文と講演とインタビューを収録した」とある。そのあとがきに、これらの五冊の詩文集が「阪神淡路大震災以後二十年間のわたしのことばの営為を収めた庫（ふう）である。いつでも取り出せる震災戦災の記録と記憶の収納庫である。」また、この詩文集の中に「兵庫県現代詩協会のことなど」という副題のついた一文が目にとまった。「兵庫県現代詩協会は阪神淡路大震災から生まれた、と言っても過言ではないだろう。／それまでも何度か兵庫県内の詩人たちの会を作ることが話し合われたことがあったが、いずれの時も実現しなかった。ところが、一九九五年一月十七日の大震災後に話し合いが持たれ、不思議と言っているほどにスムーズに事は運び、実現することになった。／大震災から二年後の一九九七年十一月二十三日に、芦屋市の市民センターで設立総会が開催された。町が崩れ、芦屋川河岸の石垣が崩れ、まだまだ震災の傷跡が残り、記憶が消えることなく満ち溢れる街、芦屋で。」

神尾和寿『アオキ』（編集工房ノア）。二〇一〇年刊行の詩集『地上のメニエー』以来、六冊目の詩集となる。おそらく、この詩集『アオキ』によって、神尾和寿は「あの、『アオキ』の詩人」と名指しされることになるだろう。確実に、飛躍的に詩の世界のステージを高めた記念碑的な詩集だ。冒頭の詩を引く。「アオキさんが／来ない／イノウエさんなら／三年前から来ている／ドラム缶にまたがってたばこを吸っている／旨そうだ／イヌのウエダ君と／サルのエグチ君に声をかければ／けんかの最中だ　かみつかれてひっつかかれて／すぐく痛いのかもしれない／アオキさんだけが　いつになっても／来ない／はじまらない」（「アオキさん」全編）。ナンセンスなのだが、そのナンセンスには意味も比喩も寓意も込められていない。つまり、ナンセンスですらない。それでいて、これは紛れもない詩であ

ると確信できるのは、ことばが切り開いた地平が、日常からも、非日常からも愛想をつかさされ、どこにも行き場がない、しかし、どこか見えないところで、ことばの本質的な無意識に繋がっているような気がする。その不思議なもどかしさの浮遊感、言葉の無意識的領域が、奇蹟的にこの世界に現出したような感覚といえはいいだろうか。これは詩ではまだ未知な、未開拓の領域である。

伊勢田史郎『またで散りゆく―岩本栄之助と中央公会堂』（編集工房ノア）。昨年七月に亡くなられた伊勢田史郎さんの遺著。伊勢田さんは言うまでもなく、当会の会長をお務めになったほか、阪神大震災の被災地の文化復興を支援した「アート・エイド・神戸」の実行委員長として、神戸の文化復興に尽力なさった。本書の前半は、大阪の中之島公会堂の建設に尽力した岩本栄之助の評伝。後半は、『階段』などからエッセイが収録されている。私には、このエッセイが懐かしい。奥様を看取ったおりのこと、好きな山行きの話など、人間味あふれる伊勢田さんの風貌が行間に彷彿として浮かぶ。また、巻末に添えられたアルバムはどれも興味深い貴重なものだし、40頁近くに及ぶ年譜も特筆もの。ただし、いずれ伊勢田さんはしっかりと顕彰されなければならない。

たなかとしひろ『イエスをめぐる人間像』（関西学院大学出版会）。私家版の詩集も含めると、著者の九冊目の詩集となる。「三つの世界」という作品がある。「学問　信仰　詩／三つの世界の／緊張と補完の／はざまに生きる／その揺れのなかで／バランスを崩さずに／心の平安を保ちつつ／どう生きるか／」（中略）そして／その世界を詩的告白として／どう表現し／心癒されて生きるのか／（以下略）。著者の詩を書く心の姿勢が素直に述べられている。なによりも詩集のタイトルが示すとおり、キリスト者としての立場で言葉を紡ぎ、心の調和を願うのである。聖書に描かれた人物たちを描いた作品群が特に目を引くが、それらを通して、あらためてイエスの言葉の深みが、深く人の心を信仰へと一気に変えていったことを知る。

## ◇常任理事会報告

■六月二十五日第二回常任理事会、私学会館にて。常任理事七名出席。二十周年記念号アンソロジーの情報提供について。アートコレクション展チラシ検討。第十回読書会（七月三十一日午後一時）私学会館。取り上げる詩人「高橋睦郎」チューター・時里二郎）二十周年記念祝賀会について。二〇一七年三月十八日（土）十二時より神戸風月堂ホールにて。会費四千五百円。「詩のフェスタひょうご」（十月二日・ラッセホール）講師は高橋睦郎氏。詳細などは次回に。

■八月二十七日第三回常任理事会、教育会館にて。常任理事八名出席。アンソロジーの進行状況。年表の情報収集。読書会報告。次回読書会は十一月二十六日『安西冬衛』の予定。アートコレクション展イベント（一月二十一日）について。「神戸の詩人を語る」は君本昌久。「歌うように 語るように」をテーマに。

シヤンソンとのコラボを予定。二十周年記念祝賀会開催内容について。「ふれあいの祭典—詩のフェスタひょうご」（十月二日・ラッセホールにて）講師・高橋睦郎氏。演題「女性詩の力に導かれて」

■十月二十九日第四回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。二十周年記念アンソロジー入稿状況。アートコレクション展（二月十四〜二十四日・神戸文学館）チラシ検討。出品者状況とコンサートについて。読書会（十一月二十六日私学会館）『安西冬衛』チューターは北野和博。創立二十周年記念祝賀会（三月十八日風月堂ホール）タイムスケジュールと参加同人誌、朗読について。申し込み締切二月二十日。理事選挙について（十名連記一月十日締切）

開票は選挙管理委員四名にて一月十三日。総会日程・五月七日（日）ラッセホールにて。

（尾崎 美紀）

## ◇会員の住所変更

信定和美

〒666-0116 川西市水明台2-2-38

（住所録の印刷ミス）

入江田吉仁

〒651-9272 神戸市西区狩場台4-20-11

内藤富美代

〒673-0866 明石市朝霧町3-4-12-101

※電話番号の変更はありません。

## ◇会員の動静

森田千代子

出版記念会 平成26年9月24日 ハナワグリル

たかとう匡子

現代詩セミナー in 神戸2016

平成26年10月22日 神戸女子大学教育センター

「新しい文学視像を求めて」講演をめぐっての討論に参加。討論者／藤井貞和・京谷裕彰・松尾省三・会場全員

時里二郎

風ぐるま2016秋公演「夢のもつれ」他

平成26年11月17日 東京・MUSICASA、11

月18日大阪・フェニックスホール

時里二郎の詩に、高橋悠治の作曲作品。声楽家波多

野睦美、バリトンサクソフス柝尾克樹。ピアノは高橋

悠治。

季村敏夫

『山河 復刻版 別冊』平成26年刊に、「山河」に

おける外地—戦時下の満州詩人について執筆。

## ◇事務局より

今年度は役員改選の年となっております。一二月の会報により告知・投票となり、一月に結果を常任理事会にて報告した後、検討・承諾を得ます。会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。

## ◇会計より

今年度会費を未納の方は振込用紙にて速やかに納めください。

年会費は4000円です。

郵便振替口座00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会

お忘れのないようよろしくお願いいたします。

前年度まで未納の方も速やかに納入いたします。

## ◇会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。

また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。

会報担当は大西隆志です。どうぞよろしくお願いいたします。

大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿3-1-9-702

メールアドレス furadou@extra.ocn.ne.jp

(ごちからかに) furadou.t@gmail.com

## ◇新入会員をご紹介ください。

担当の尾崎美紀・神田さよまでお知らせ下さい。

また住所変更、退会の会員は事務局までご連絡下さい

連絡先 入退会担当 尾崎美紀

事務局 神田さよ

◇会員の発行書

2016年6月〜2016年11月  
 たなかとしひろ詩集『イエスをめぐる人間像』  
 関西学院大学出版サービス  
 『隣の隣は隣』神戸わが街 安水稔和 編集工房ノア  
 神尾和寿詩集『アオキ』編集工房ノア  
 『またで散りゆく』岩本栄之助と中央公会堂  
 故伊勢田史郎 編集工房ノア  
 『神戸わが街』ここがロドスだここで踊ろう  
 安水稔和 神戸新聞総合出版センター

◇会員の詩誌

プラタナス60号(玉川侑香)  
 レフレクション13号・14号・15号(川田あひる)  
 おたくさ21・22(鈴木渚)  
 Messier 47号・48号(香山雅代)  
 多島海29号・30号(江口節)  
 別嬢100号・101号(高橋夏男)  
 アリゼ173号・174号・175号(以倉紘平)  
 鶴鴿6号(江口節)  
 鳥 70号(足立勝歳)  
 汽水湖2号(福永祥子)  
 Poetry Enging 34号(寺田操)  
 現代詩神戸 254号・255号(永井ますみ)  
 風の音12号(たかとう匡子)  
 ロッジア16号(時里二郎)  
 ア・テンポ50号(玉井洋子)  
 河口から・個人誌Ⅰ・Ⅱ号(季村敏夫)  
 月刊めらんじゅ115号〜119号(大橋愛由等)

◇他団体の出版

秋田県現代詩年鑑2016(秋田県詩人協会)  
 三重県詩人集24号(三重県詩人クラブ)  
 呼吸140号(現代京都詩話会)  
 福島県現代詩集2016(福島県現代詩人会)

いしかわ詩人十集(石川詩人会会長米村香)  
 栃木県現代詩年鑑平成28年度版(栃木県現代詩人会)  
 年刊詩集2016(徳島現代詩協会)  
 いわたの詩2016(岩手県詩人クラブ)  
 とつとり詩集2016第7集(鳥取県現代詩人協会)  
 年刊詩集ふくい2016(福井県詩人懇話会)  
 宮城の現代詩2016(宮城県詩人会)

◇他団体の会報

埼玉詩人会会報79号80号(埼玉詩人会高橋次夫)  
 岐阜県詩人会会報6号7号(頼圭二郎)  
 秋田県現代詩協会会報53号54号(横山仁)  
 福岡県詩人会 164号(田島安江)  
 詩界通信74号75号(日本詩人クラブ)  
 中四国詩人会ニュースレター34号(中四国詩人会)  
 高知詩の会通信 15号(林嗣夫)  
 いちご通信14号15号(大分県詩人連盟)  
 石川詩人 42号(石川詩人会)  
 島根県詩人連合会報 80号  
 長野県詩人協会会報132号(長野県詩人協会)  
 ずかけ349号〜353号(兵庫県芸術文化協会)  
 とつとり詩人34号(鳥取県現代詩人協会会報)  
 中日詩人会会報186号・187号(岩井昭)  
 岡山県詩人協会だより17号18号(重光はるみ)  
 山形県詩人会会報30号(高橋英司)  
 福井県詩人懇話会会報928(千葉晃弘)  
 茨城県詩人協会会報22号(松美仙魚)  
 宮城県詩人会会報23号(前原正治)  
 日本現代詩人会会報143号・144号(以倉紘平)  
 大分県詩人協会会報146号(長谷目源太)  
 関西詩人協会会報82号(関西詩人協会)  
 静岡県詩人128号(静岡詩人会)  
 詩の会38号(宮崎県詩の会)  
 福島県現代詩人会会報113号(大田隆夫)  
 群馬詩人クラブ会報297号(磯貝優子)

◇逝去

北原文雄 兵庫県現代詩協会会員・半ドンの会副代表  
 9月14日 蜘蛛膜下出血により逝去

◇『ひょうご現代詩集』とアンソロジー年譜『二〇年のあゆみ』についての進捗

兵庫県現代詩協会は二〇一六年に発足二十周年を迎えました。その記念事業のアンソロジー『ひょうご現代詩集 二〇一六』は、順調に制作工程が流れています。まもなく校正が出版社(澤標)から届きますので、個人々人で校正いただきますようによろしくお願いいたします。  
 「会員全員参加のアンソロジー詩集」として思っていました。諸事情で残念ながら参加できない会員もいらっしゃいます。『ひょうご現代詩集 二〇一六』に含まれる「兵庫県現代詩協会 20年のあゆみ」と題する年表は、文化的に意味のある年表になるよう編集は進んでいます。兵庫県現代詩協会がスタートするきっかけとなった阪神・淡路大震災があり、協会が本格的にスタートを切った一九九七年からの保存記録とし、アーカイブとして、詩史年譜が後年意味を帯びてくると思えます。

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ  
 〒663-8006 西宮市段上町6-14-4  
 電話 0798(53)0686

★会計／野口幸雄  
 〒667-0846 神戸市灘区岩屋北町  
 4-4-5-902

★会報編集／大西隆志  
 〒670-0061 姫路市西今宿3丁目1番9の702

★印刷所／社会福祉法人 新生会 新生会作業所  
 〒662-0913 西宮市染殿段町2の11